

「継ぎ目」

関西学院高等部

下山　詩温

表紙

（一）

雨の日の木は、少しだけ昔の匂いがする。それが雨のせいなのか、木そのものが持っている記憶なのか、彼には分からなかった。ただ、その匂いを嗅ぐと、胸の奥にしまっていた何かが静かに動くような気がした。

商店街の端に、その店はあった。古びた建物だった。隣の八百屋は何年も前から変わらない赤い屋根をしていて、向かいの時計屋はいつ見ても三分遅れている。人通りの少ないこの場所では、時間だけが少し置き去りにされているようだった。

その店にも、看板はなかった。店名も、営業時間も、何を売っているのかも分からない。ただ、曇ったガラス戸の横に、小さな木札が掛かっていた。

『営業中』

それだけだった。彼は一度、その前を通り過ぎた。用事があったわけではない。急いでいるわけでもなかった。ただ、足を止める理由が見つからなかったから通り過ぎたのだ。数歩進んだところで、ふと思い出し、振り返ってみた。店の中にはいくつかの家具が並んでいた。机。椅子。本棚。抽斗。どれも古いものだったが、不思議と汚れてはいなかった。むしろ。大切にされすぎているように見えた。彼はガラス戸に手をかけた。鈴の音はしなかった。

「いらっしゃい。」

白髪の老人が、奥からゆっくりと姿を現した。

「家具をお探しですか。」

「…いえ。」

彼は首を横に振った。どうしよう。彼にはここに来た明確な理由がないのだ。

「雨宿りです。」

老人は嫌な顔をしなかった。

「そうですか。」

そう言って、彼に小さな椅子を差し出した。

少し覗いただけなのにと思いつつ、椅子に腰掛けようとする。と、そこで、彼は手を止めた。椅子には脚が三本しかなかったのだ。思わず止まっていると、老人は少し笑った。

「壊れてはいません。」

「でも」

「足りないだけです。」

その言葉が妙に残った。足りない。壊れている、ではなく。老人は店の中を見渡した。彼も改めて店を見る。確かに、どの家具にも何かが足りなかった。机には抽斗がない。本棚には一段だけ空白がある。箪笥は片方の取っ手だけがない。けれど、それは失敗した家具には見えなかった。まるで、誰かを待っている途中の姿だった。

「完成していないんです。」

老人は言った。
「だから、まだここにあります。」
「完成したらどうなるんですか？」
彼が聞くと、老人は少し考えるように窓の外を見た。雨粒がガラスを伝っている。
「完成した家具は」
老人は静かに言った。
「誰かを待たなくなるのです。」
意味は分からなかった。でも、不思議と聞き返す気にはならなかった。分からないものには、分からないまま置いておく時間が必要なこともある。
彼は店の奥にある小さな机を見た。他の家具より古い。けれど、一番綺麗だった。木目は穏やかで、何度も誰かに触られてきたような艶がある。ただひとつだけ。抽斗がなかった。なぜか、その机から目を離せなかった。懐かしいわけではない。思い出があるわけでもない。それなのに、初めて会った人に「久しぶり」と言われたような、不思議な感覚がした。
「その机が気になりますか。」
彼は小さくうなずいた。
「まだ、帰る場所が決まっていない家具です。」
その言葉を聞いた瞬間、胸の奥が少しだけ痛んだ。帰る場所。その言葉を自分がいつから聞いていないのか。彼には思い出せなかった。

（二）

彼がその店に通うようになったのは、三日後のことだった。理由はなかった。ただ、学校からの帰り道、気がつけば商店街の端へ向かっていた。自分でも不思議だった。あの店に何か用事があるわけではない。家具を買いたいわけでもない。それなのに、あの古い木の匂いをもう一度嗅ぎたいと思った。店のガラス戸には、今日も同じ小さな木札が掛かっていた。
『営業中』
中へ入ってみる。老人は驚かなかった。
「今日は雨ではありませんね。」
「そうですね。」
「それでも来ましたか。」
彼は少し困った。
「…来てはいけませんでしたか。」
老人は静かに首を振る。
「いいえ。」
そして、机を磨きながら言った。

「家具屋というものは、用事がある人だけが来る場所ではありませんから。」

彼にはその意味がよく分からなかった。店には、いつも静かな時間が流れていた。時計の針の音も、外を走る車の音も、ここでは少し遠く聞こえる。彼は決まって、あの小さな机の近くに立った。触れたことはない。触れてはいけない気がした。その机には、まだ誰にも知られていない秘密があるように思えた。

「今日はお客さんが来ますよ。」

老人が突然言った。

「家具は、人が来る前に少しだけ騒がしくなります。」

彼は店を見渡した。家具たちは何も変わらない。ただ静かにそこにあるだけだった。

しばらくすると、ガラス戸が開いた。入ってきたのは、六十代くらいの女性だった。日傘を丁寧にたたみ、店の中を見渡す。

「すみません。」

女性は言った。

「探しているものがあるんです。」

老人はうなずいた。

「どのようなものですか。」

女性は少し迷った。

「…分かりません。分からないものを探しているんです。」

老人は驚かなかった。

「なくしたものですか。」

女性はゆっくりとうなずいた。

「たぶん。」

その言葉に、彼は少し引っかかった。なくしたなら、普通は何をなくしたか分かる。財布。鍵。写真。名前のあるもの。けれど、この店では違うらしかった。老人は女性を店の奥へと案内した。

「最後に、それを感じたのはいつですか。」

「感じた？」

「なくしたものは、物とは限りません。」

女性は黙った。しばらくして、小さな声で言った。

「主人が亡くなってからです。」

店の雰囲気が少し変わるのを肌で感じる。女性は続けた。

「悲しいとは思いました。でも、時間が経てば少しずつ薄れると思っていました。でも、ある日気がついたんです。」

女性は窓の外を見る。

「主人の好きだった花も、名前が出てこなかった。」
彼は黙って聞いていた。
「毎朝飲んでいたコーヒーの銘柄も思い出せない。声も、少しずつ遠くなっている気がする。」
女性は自分の手を見た。
「忘れたくないのに、忘れてしまうんです。」
老人は何も言わなかった。彼も何も言えなかった。
しばらくして、老人は一つの椅子を指した。それは店の隅に置かれた、小さな木の椅子だった。
「座ってみてください。」
女性は恐る恐る腰を下ろした。その瞬間。椅子の背もたれにあった傷が、淡い光を反射したように見えた。彼は目を疑った。もちろん、光ったわけではない。ただ、木目が変わったように感じた。女性は目を閉じた。何も言えない。ただ、涙を流していた。
女性は立ち上がった。
「ありがとうございます。」
老人は聞いた。
「見つかりましたか？」
「いいえ」
女性は、首を横に振りながら少し笑った。
「でも、なくなっていなかったことが分かりました。」
彼女が帰ったあと、彼は老人に聞いた。
「何を渡したんですか。」
老人は椅子を見ながら答えた。
「何も。」
「でも。家具は、なくしたものを返す場所ではありません。」
老人は静かに続けた。
「その人の中に、まだ残っているものを見つける場所です。」
彼は小さな机を見る。抽斗のない机。
「じゃあ、あの机にも何か残っているんですか。」
老人は少し黙った。
「ええ。」
老人はそれ以上答えなかった。代わりに、机の木目を指でなぞった。
「まだ思い出していないものです。」
その夜、彼は夢を見た。誰かが自分を呼んでいる夢だった。けれど、名前だけが聞き取れなかった。目を覚ました後も、その声だけが耳に残っていた。不思議だった。知らない声だ

ったはずなのに。ずっと前から知っていたような気がした。

（三）

彼がその店で働くようになった理由を、彼自身もうまく説明できなかった。最初は、ただ手伝いだった。老人が一人で家具を磨き、削り、直している姿を見ているうちに、気がつけば布を受け取っていた。

「力仕事は得意ではありません。」

そう言うと、老人は笑った。

「家具を直すのに、一番必要なのは力ではありませんから。」

「じゃあ、何が必要ですか。」

老人は少し考えた。

「待つことです。」

その答えが、彼には少し不思議だった。家具を作るのに、待つ。人間なら分かる。誰かを待つこと。返事を待つこと。春を待つこと。でも、木でできたものにも待つ時間があるのだろうか。

彼は毎日、店の家具を磨いた。棚の奥に溜まった埃を取り、机の傷を撫で、椅子の表面に油を塗る。不思議なことに、家具は手をかけるほど表情を変えた。同じ木なのに、昨日とは違って見える。老人に聞くと、

「家具も人も、見ようとしなければ見えないものがあります。」

と言った。

彼はその言葉を何度も思い返した。自分は、誰かにちゃんと見てもらったことがあるだろうか。そんなことを考えて、すぐにやめた。考えようとしても、思い出せない。昔住んでいた場所。好きだったもの。誕生日。家族。友達。何一つ、はっきりと浮かばなかった。ただ、不思議と寂しくはなかった。失ったというより、最初から持っていなかったような感覚だった。

ある日、老人が古い椅子を店の中央へ運んだ。背もたれの部分に、大きな傷がある椅子だった。

「これは、もう直らないんですか。」

彼が聞くと、老人は強く、でも優しく、首を横に振った。

「直します。」

「でも、その傷は消えませんよ。」

「消す必要はありません。」

老人は傷を指でなぞった。

「傷があるから、この椅子はこの椅子なんです。」

「綺麗にした方がいいんじゃないですか。」
老人は微笑んだ。
「継ぎ目を隠した家具は、少し寂しそうに見えます。」
継ぎ目。離れていたものを繋ぐ場所。壊れたものを隠す場所ではなく、繋がっていた証。
その日の夜、彼はまた夢を見た。暗い場所にいた。周りには木の匂いが漂っていた。誰かの声が聞こえる。
「もう少しだから。」
誰かが言った。
「あと少しで、君は誰かのところへ行ける。」
彼は尋ねた。
「僕は、誰ですか。」
返事はなかった。目を覚ますと、窓の外は朝だった。彼はしばらく天井を見つめていた。夢の内容はほとんど忘れていた。けれど、一つだけ覚えていた。誰かが自分を呼んでいた。名前ではなく。もっと別の呼び方で。
その日、店に一人の少年が来た。十歳くらいの男の子だった。手には、小さな箱を持っている。
「これを直してください。」
少年は箱を差し出した。古い木箱だった。角は欠け、蓋にはひびが入っている。
「大切な物ですか。」
彼が聞くと、少年は首を振った。
「分からないです。」
「分からない？」
「お母さんが昔使っていたって言ってました。」
少年は箱を見つめる。
「でも、中に何を入れていたのかは知らないんです。」
老人は箱を受け取った。そして、しばらく静かに眺めた。
「これは、直すところが少ないですね。」
「え？」
「もう十分、繋がっています。」
老人は、箱の蓋をそっと閉じた。
「この箱がなくしたものは、中身ではありません。」
少年は不思議そうな顔をした。
「じゃあ何ですか。」
老人は答えなかった。代わりに、少年へ箱を返した。

「持って帰って、聞いてみるといいでしょう。」
少年が帰ったあと、彼は老人に聞いた。
「何が入っていたんでしょう。」
老人は、窓の外を見る。
「たぶん、物ではないものです。」
「そんなもの、箱に入るんですか。」
老人は笑った。
「人は、入らないものほど大切にしまいますから。」
彼はその言葉を聞きながら、小さな机を見た。抽斗のない机。そこには何も入れられない。なのに、なぜか空っぽには見えなかった。むしろ、誰かがまだ入れるものを待っているようだった。
彼がこの店に通うようになってから、季節は少しずつ変わっていった。初めて訪れた日は雨だった。けれど、今では窓から差し込む光も、聞こえてくる街の音も、少しずつ違っている。変わらないのは、店の中にある家具たちだった。机は、机のまま。椅子は、椅子のまま。本棚は、本棚のまま。それなのに、彼には少しずつ変化しているように見えた。家具は、誰かに見つめられることで表情を変える。老人はそう言っていた。
「人も同じですよ。」
ある日、老人は突然そう言った。彼が古い椅子を磨いている時だった。
「人も、ですか。」
「ええ。」
老人は椅子の背もたれについた小さな傷を見た。
「その人がどんな時間を過ごしてきたかで、その人の形は変わります。」
「でも、傷は傷ですよね。」
「傷があるから、その人だけの形になるんです。」
老人は傷の部分を優しく撫でた。
「綺麗なところだけでできたものなんて、ありませんから。」
その言葉を聞いたとき、彼はなぜか少し寂しくなった。自分には、傷すらない気がした。思い出そうとしても、過去が浮かばない。誰かに褒められたこと。誰かと喧嘩したこと。誰かと笑ったこと。何も思い出せない。けれど、不思議と空っぽではなかった。むしろ、何かが入るための場所だけが残されているようだった。
ある日の夕方、彼は店の奥にある棚を整理していた。古い紙の束が出てきた。家具の記録だった。どの家具が、いつ作られたのか。誰の元へ言ったのか。彼は一枚一枚めくった。そこには、不思議な言葉が並んでいた。
『修復完了』『引き渡し済』『帰宅』

家具に対して使うには、少し変な言葉だった。けれど、この店では自然に感じた。

ページをめくる。さらに古い記録。その中に、一つだけ違うものがあった。名前が書かれていない。ただ、

『制作中』

とだけ記されていた。横には、小さな机の絵。抽斗のない机。彼はしばらく動けなかった。

「それは、まだ途中のものです。」

いつの間にか、老人が後ろに立っていた。

「誰のものなんですか。」

老人は答えなかった。

「まだ、決まっていません。」

「でも、家具は誰かに使われるものですよね。」

老人は静かにうなずく。

「だからこそ、待つ時間があります。」

彼は机を見る。なぜか、その机を見ると胸の奥がざわついた。初めてこの店に来た日から。ずっと。

「継ぎ目って、何なんですか。」

彼が尋ねた。老人は少し驚いたように目を細めた。そして、ゆっくり答えた。

「離れていたものが、もう一度繋がった場所です。」

「傷を隠すものじゃないんですか。」

「違います。」

老人は言った。

「そこに、繋がっていた証が残るんです。」

彼は自分の手を見る。自分にも、そんな証があるのだろうか。誰かと繋がった跡。誰かに必要とされた跡。考えても、考えても、何も浮かばなかった。

その夜。彼は店にある鏡の前に立った。理由は分からなかった。ただ、確かめたかった。鏡には、店の中が映っていた。机。椅子。棚。そして老人。

（四）

翌朝、彼はいつものように店へ向かった。けれど、昨日までとは少し違っていた。店の扉を開ける前から、彼には分かっていた。もう、自分は何も知らないふりをできない。店の奥には、昨日見た帳簿が置かれていた。老人は何も言わなかった。ただ、彼がページを開くのを静かに見ていた。古い記録の最後。そこには、名前のない一つの記録があった。

『制作中』

そのよこには、小さな文字でこう書かれていた。

『抽斗未完成』

彼は、その言葉を何度も読んだ。抽斗。そこに入れるもの。誰かの思い出。誰かの秘密。誰かが帰ってきた時に置いていく、小さなもの。自分には、それがなかった。だから、ずっと探していたのかもしれない。なくしたものではなく、これから入るものを。

老人が言った。

「家具は、完成したときに価値を持つものではありません。」

彼は顔を上げた。

「誰かのそばに置かれたとき、初めて意味を持つんです。」

彼は静かに机へ近づいた。抽斗のない机。欠けたままの家具。けれど、不思議と悲しくはなかった。欠けているからこそ、誰かを待つことができる。空いているからこそ、何かを受け入れることができる。それはきっと、人も同じなのだ。

その時、初めて気がついた。私は、完成したかったわけではない。誰かに必要とされることで、自分の形を知りたかったのだ。私は完成することを待っていた。誰かの記憶を置くための場所。誰かの手紙をしまうための場所。誰かが帰ってきた時、静かにそこにある場所。けれど、それは家具だけの話ではない。人もきっと、同じなのだ。傷や欠けた部分を抱えながら、誰かと繋がっていく。木は、森を離れた瞬間から家具になるのではない。誰かの暮らしに触れたとき、初めてその役割を持つ。

継ぎ目は、壊れた跡ではない。そこに確かに、何かがあった証なのだ。外へ出ると、雨は止んでいた。あの日と同じような匂いがした。けれど、もう昔とは違った。木の匂いの中に、自分の帰る場所を見つけた気がした。

私はまだ。完成していない。それでもいいと思った。誰かと繋がっていられるなら。それだけで十分だった。失ったものが戻らなくても。戻れない場所があったとしても。これから誰かの帰る場所になれるのなら。